

タイトル	退職にあたって ・略歴・研究業績
著者	池内, 静司; IKEUCHI, Seiji
引用	北海学園大学人文論集(58): 19-23
発行日	2015-03-31



池内静司教授

〈退職にあたって〉

池 内 静 司

北海学園大学にお世話になって、今春で32年になります。今は廃止となった教養部を振り出しに、大学改革の進展とともに、共通教育センター、経済学部と所属が変わり、2007年4月に人文学部英米文化学科へ配属となりました。これまでの人生のほぼ半分を、大学の発展とともに過ごさせていただいたことになります。

振り返ってみますと、この間の大学の変貌には目を見張るものがありました。32年前、勤務し始めた頃は、6号館、7号館はまだ計画もされていなかったようですし、5号館と図書館が建設されたのは、数年が経過してからのことでした。各課や学部事務が並んでいる1号館や3号館の一階の様子は、家のリフォームを扱った番組で取り上げられる家屋ほども大きく変貌したように思われます。古い校舎の記憶とともに、各種委員会の仕事に追われていた頃のことを懐かしく思い出されます。当時の委員の方々は今では考えられないほど若々しい姿で甦ってきて、思わず微笑ましい気持ちにもなります。

私の担当科目は共通教育の「英語」でしたが、人文学部開設後のかなり早い時期から英米文化学科の専門科目である「英米文学講読」を兼担し、また、数年の間「英国文化論講読」を担当する機会をいただき、人文学部に配属になる以前から学部との縁はそれなりに深かったのだと感じています。「英米文学講読」でこれまでに扱った作品は、19世紀の作家 T. ハーディや20世紀の小説家 J. ジョイスらの短編小説、20世紀の詩人 T. S. エリオットの詩劇、19世紀の随筆家チャールズ・ラムの「シェイクスピア物語」などが主なところでした。ラムの場合はシェイクスピア作品の導入という

意図で取り上げましたが、他の作家の場合は、19～20世紀初頭の英文学史上に見られた一つの動向を捉えて、作品を読みたいというのが選択の意図でした。その意味ではエリオットの場合も、さらに若干の補足が必要ではありました。また、週に一回しかない半期だけの授業ですから、それなりに相応しいと感ぜられるものを選んで味読してきましたが、オリジナルを読むのは常に言葉の壁に阻まれることの連続であったように思います。程よく作品の世界に入り込んでいる状態を実感できるようなある程度のスピードをもって読み進めることは、多くの学生にとってかなり難しいことであったと思います。また、何が書かれているのかを説明できることを授業では常に求め続けました。それは、説明することで思考をより明確にするためでした。

私の授業をきっかけにして、英米文学に少しでも興味のわいた受講生がいましたなら、とてもうれしく思います。

略 歴

いけうち せいじ 池内 静司 1951年6月9日生

学 歴

- 1976年3月 北海道大学経済学部経済学科 卒業（経済学士）
1983年3月 北海道大学大学院文学研究科 英語英米文学専攻修士課程
修了（文学修士）

職 歴

- 1976年4月 北海道立浦幌高等学校教諭
1983年4月 北海学園大学教養部講師
1990年4月 同上 助教授
1998年4月 北海学園大学共通教育研究センター助教授
2001年4月 北海学園大学経済学部教授
2007年4月 北海学園大学人文学部教授

主な研究業績

論文

1. T. S. Eliot の「客観的相関物」について
『北海道英語英文学』第28号（日本英文学会北海道支部学会）1983年
6月
2. T. S. Eliot の‘sensibility’論をめぐって
『学園論集』第46号（北海学園大学）1983年12月
3. T. S. エリオットの文学と哲学論文
『学園論集』第58号（北海学園大学）1987年12月

4. T. S. エリオットの宗教的感受性とブラッドリー哲学の研究
『学園論集』第64号(北海学園大学)1989年12月
5. T. S. エリオットの伝統論の変容(その一)——伝統論の形成とF. H. ブラッドリー
『学園論集』第90号(北海学園大学)1996年12月
6. T. S. エリオットの詩論とダン批評の展開——クラーク講義を資料に加えて——
『近代英文学への招待——形而上派からモダニズムへ』本田錦一郎編著(北星堂)1998年9月
7. T. S. エリオットのクラーク講義——〈善と悪〉の問題と詩人の役割——
『学園論集』第104号(北海学園大学)2000年7月

学会発表

1. T. S. Eliot の「客観的相関物」について
日本英文学会北海道支部学会 第26回大会(北海道大学文学部)1981年10月
2. T. S. エリオットの初期批評の展開
日本T. S. エリオット協会 第5回大会(同志社大学)1992年11月
3. T. S. エリオットの『ハムレット』論(シンポジウム:『ハムレット』——その時代と今)(日本英文学会北海道支部 第54回大会, 於: 北海道教育大学 函館校)2009年10月

その他

1. 講演
第42回英米文学講座(日本英文学会北海道支部学会主催) 講師
演題:T. S. エリオット, 秩序, そして, 神話
2000年6月22日(北海道大学文学部)
2. 翻訳
「夫婦で語る・北海道の印象」(ノーマン・L・ブキナニ, ドーリン・インドラ・ブキナニ)『北海道から』第1号(学校法人: 北海学園大学)

1985年9月

3. エッセイ

「T. S. エリオットと『バーント・ノートン』」「図書館だより」No. 1 (北海学園大学図書館) 2009年

「故本田錦一郎先生 追悼」(『アレーテイア』XXII) (アレーテイア文学研究会) 2007年